

2019年3月13日発行（通算第286号）

世界情勢ブリーフィング

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/>

■ ヴェネズエラ暫定大統領が帰国、出国禁止命令を無視で逮捕の恐れも（3月5日付BBC）

<https://www.bbc.com/japanese/47437629>

■ ベネズエラ全土で停電 4 日目、略奪や断水で市民に混乱広がる（3月11日付ロイター）

<https://jp.reuters.com/article/venezuela-politics-idJPKBN1QS0HW>

■ ベネズエラ大停電、国会が「国家警戒態勢」宣言 大統領は学校や職場の閉鎖延長（3月12日付AFP）

<https://www.afpbb.com/articles/-/3215236>

「ベネズエラ現代史（1）：ウーゴ・チャベスの『ボリバル革命』」（2/27）の続きです。

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=6978>

前回は、ベネズエラの独立から「南米の優等生」といわれた安定した議会制民主主義の時代、99年のウーゴ・チャベスの政権奪取から02年の48時間クーデターまでを解説しました。

今回は、チャベスの急進化と「21世紀の社会主義」の功罪、マドゥロ政権の発足について説明し、最後に現在の情勢について解説します。

ベネズエラ現代史（2）：「21世紀の社会主義」の幻影

● 「21世紀の社会主義」の栄光と挫折

前回述べたとおり、02年以降チャベスの外交政策は急進化しましたが、それまでの比較的穏健だった経済政策も転換します。チャベスは、民間企業の国有化、価格・為替・外貨取引の統制を進め、国家の介入を一気に拡大させました。05年には、「ボリバル革命」が目指すものは「21世紀の社会主義」とであると明言するようになります。

ちょうどこの頃（04～08年）は、低迷していた石油価格が上昇した時期でした。石油価格の上昇は財政支出の拡大を可能にし、04～08年には10%前後の高成長が実現しました。一人当たりGDPは1万ドルを超え、貧困と所得格差も急速に改善します。経済の好調を背景に06年の大統領選でチャベスは圧勝。「チャベス神話」ともいわれる根強い人気は、この時期の「功績」が大きかったようです。

「21世紀の社会主義」は世界的にも注目を集めました。21世紀に入ってからラテンアメリカの左傾化現象（ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、ボリビア、チリ、コスタリカ、ペルーで相次いで左派政権が誕生）の先鞭をつけ、その筆頭格と目されました。

しかし、08年の世界経済危機後に石油価格が下落すると、09～10年はマイナス成長に転じます。石油価格の回復により、11年からプラスに戻りますが、強引な国家統制政策はインフレと物不足を生み出し、国民生活を疲弊させました。国営石油会社PDVSAを支配下に置くために職員を大量解雇し、さらに政府への多額の資金供与を義務付けたことにより、石油生産量が低迷したことも打撃になりました。

チャベス政権の最大の功績は貧困削減と所得格差の是正でしたが、ともに状況は悪化し、貧困率は政権発足前

の水準に戻りました。なお、「21世紀の社会主義」といっても、ソ連のような共産主義を実現したわけではありません。強権的な国家介入型の市場経済に過ぎず、石油収入頼みだった点を含め、結局のところチャベス以前のシステムからそれほど変わるものではなかったとも言われています。

経済に加えて治安も急激に悪化し、国民の反発が高まります。10年の総選挙では反チャベスが躍進を遂げ、反チャベス派の得票率がチャベス派を上回りました。

12年10月の大統領選挙でチャベスは野党連合のエンリケ・カプリレスと対決。カプリレスは地方政治で実績を残したカリスマ性のあるリーダーで、過去3回の選挙で圧勝してきたチャベスも苦戦が予想されました。しかし、貧困層の根強い支持や組織票、選挙不正の疑惑もあり、チャベスは10ポイントの差をつけて勝利。4選を果たします。

チャベスの長期政権は続くかと思われましたが、チャベスは11年からガンを患っていました。大統領選後の12月に治療のためキューバに渡航し、13年2月に帰国しますが、3月に死亡が発表されました。

●カリスマなき「チャベス主義」の時代

チャベスの死去を受けて13年4月に大統領選が実施されます。チャベスが後継者に指名したマドウロが1.5%という僅差でカプリレスに勝利しました。

マドウロは元バス運転手という労働者階級出身で、労働組合運動で頭角を現した人物です。若いころはキューバに渡って共産主義理論を学びつつ、キューバの情報機関とのパイプを作りました。92年のチャベス中佐（当時）のクーデター計画を支援し、それ以来チャベスの腹心として重用されました。

チャベス政権では軍人派と文民派の派閥争いがあり、行政官として実績を積んだマドウロは文民派のリーダー的存在になりました。マドウロは忠実なチャベス主義者といわれ、チャベスから高い信頼を得ており、死亡直前に後継者に指名されたことが最大の強みになりました。

マドウロはチャベス主義の継承を前面に立て、国家統制路線を徹底します。14年から原油価格が低迷するとベネズエラ経済は危機的状況に陥りました。マドウロは反対派を抑圧するため、17年に議会の立法権を停止して「制憲議会」の選挙を断行。その結果発足した制憲議会が立法権を握り、議会制民主主義は事実上崩壊します。マドウロはチャベスを超える独裁的権力を手にしました。

18年5月に実施された大統領選挙では野党連合は自由で公正な選挙が保証されていないとして不参加を表明。マドウロは66.6%の得票を得て再選を果たしましたが、米国やEU、G7、リマ・グループの国々は選挙過程の不正を非難しました。それ以降の展開については以下の記事で述べたとおりです。

・「ベネズエラ情勢の緊迫」（2/8）

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=6860>

・「ベネズエラ情勢の緊迫の継続」（2/25）

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=6974>

●マドウロ政権と野党勢力の難局

最新情勢について述べると、膠着状態に陥っています。マドウロ政権は、米国をはじめとする諸外国からの報復を恐れ、出国禁止令を無視して外遊し帰国したグアイドに手出しができません。時間が経てば野党勢力のモメンタムが下がると読んで静かな対応をとっていますが、逆に言えばそれしかできず、手詰まり状態といえます。

一方、野党勢力も、グアイドの暫定大統領宣言と反政府デモを始めてから約2か月経っていますが、政権移行の見通しは見えません。軍の離反は少しずつ進んでいるが、とはいえ政権を退陣に追い込むほどの勢いはなく、支持層が疲弊することが懸念されます。

先週から大規模な停電が続いていますが、マドゥロ政権は反体制派や米国のサイバー攻撃が原因と主張し、詳細は明らかになっていません。ただ政権に修復能力がないことは明らかであり、市民の反発が高まることはもちろん、軍の離反にもつながる可能性があります。しかし同時に、野党勢力を支持する市民にとっては生存のために手いっぱい、デモどころではなくなるので、両刃の剣になります。

それでも野党勢力は、国際社会に対しマドゥロへの圧力と国民への支援を要請し、デモに加えて国営企業のストライキ等を起こし、また軍に対しては恩赦のみならずある程度の既得権の温存を認めるなど、打つ手はあります。時間はかかりますが、マドゥロ政権の継続は厳しいという見通しに変更はありません。懸念されるのは、膠着状態が続き、停電等によって国民生活の危機的状況が深まる中で、反政府運動が暴動に転化することです。

ベネズエラの強権体制を支えているのはチャベスが築いた体制の堅固さにありますが、その大きな要素の一つはチャベスというリーダーのカリスマにありました。マドゥロはチャベスを神格化することで「チャベス主義」の体制の正当化を図ってきましたが、それは裏を返せば、現在の難局はマドゥロの個人的な力不足に帰せられる、という結論につながるリスクがあります。「ボリバル革命」と「21世紀の社会主義」の幻影も終わりが見えてきたのかもしれません。

最後に、米国についていえば、ペンス副大統領の積極姿勢が注目されています。2月下旬にペンスはコロンビアを訪れ、リマ・グループ参加各国と協議を行い、ベネズエラの暫定大統領就任を宣言したグアイド国会議長とも会談しました。ペンスのラテンアメリカ訪問は5回に上ります。

トランプ政権で影に隠れている印象が強いペンスですが、ラテンアメリカについては存在感を発揮しており、ベネズエラへの介入もペンスがトランプを説き伏せたといわれています。トランプも、ベネズエラは同じ米州で、国内のヒスパニック有権者との関わりも深く、シリアやアフガンとは異なり、米国が積極的に動くべきである、と考えている節が見えます。

あとがき

■ 大ヒット中国SF映画、日本映画のパクリか（3月5日付大紀元）
<https://www.epochtimes.jp/2019/03/40938.html>

最近中国では国産SF映画『さまよえる地球（流浪地球）』が大ヒットしていますが、チケットに「共産党が地球を救う」と書いてあるなど、香ばしいネタも多い話題作です。それが、今度はパクリ疑惑。

それにしても、1962年の日本映画が元ネタとは・・逆に、よく見つけましたね、中国の方々も。よほどマニアックなファンがいるのでしょうか。『妖星ゴラス』、何となく『宇宙からのメッセージ』（深作欣二監督、1978年公開）や『さよならジュピター』（橋本幸治・小松左京監督、1984年公開）を思い出させる趣ですが、私も見たくなりました。

【発行】The Gucci Post
(Copyright 2019 グッチーポスト株式会社)
【世界情勢ブリーフィングHP】<https://guccipost.co.jp/blog/jd/>
【バックナンバー】<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?cat=29>
【グッチーポストHP】<https://guccipost.co.jp/blog/>
【編集部Facebook】<https://www.facebook.com/GucciPost/>
【編集部twitter】https://twitter.com/gucci_post
【お問い合わせ】inquire@guccipost.co.jp
【内容についての質問・コメント】jd.world.briefing@gmail.com

※本メルマガの内容は、筆者の個人的な見解であり、グッチーポスト株式会社含めいかなる組織またはグッチー編集長含め他のいかなる個人の見解を代表ないし代理するものではなく、他の個人または組織がその内容に対して責任を負うことはありません。